労協連だより

田嶋　康利

労協連では、協同労働運動の到達段階と展望・課題を鮮明にすべく12月に連続して２つの会議と集会－「全国代表者会議」（６、７日）、「第15回全国ケアワーカー集会2013」（14～15）を開催した。

両集会を通して、『里山資本主義』（藻谷浩介・NHK広島取材班、角川oneテーマ21、2013年７月）に登場する和田芳治さん（逆手塾会長、人間幸学研究所所長）、熊原保さん（社会福祉法人優輝福祉会）、井上恭介さん（NHK広島放送局チーフ・プロデューサー）、松嶋匡史さん（瀬戸内ジャムズガーデン代表）らに鼎談者や報告者として登場いただき、いずれの方々のお話も、参加した私たちに感動と新たなる決意を与えるものとなった。それらは「里山資本主義」で描かれているその本質－「ハンデのある人や地域はマイナスではなく、玉手箱のように輝くという逆転の発想。地域で無用だと思われていた資源（人や自然）を再利用することで原価ゼロ円からの経済を再生し、コミュニティ再生と自立した地域経済を確立する。そしてそれは、マネー資本主義の生み出す歪みを補うサブシステムとして、そして非常時にはマネー資本主義に代わって表に立つバックアップシステムとして、日本と世界の脆弱性を補完し、人類の生き残る道」を示すものであった。

戦後の高度経済成長を推進してきた大工業社会―大量生産・大量消費・大量廃棄システムのもとでの成長経済－とそれを支えてきた福祉国家の破綻的事態を迎える中でその危機を暴力的に突破するがごとく、国家主義の強化－社会を破壊するような格差と反動の嵐が吹き荒れる中で、社会の持続可能性（人間らしく働くこと、生きること、暮らすこと）は破局的な事態を迎えている。一人ひとりの市民がその歴史的危機ともいえる状況をどう超えていくことができるか、「里山資本主義」はまさにその可能性と展望を示している。しかもその可能性は、「里山」にだけ拓かれる展望ではなく、都市部においていかに里山的なあり方（地域資源である人と人との関係）をつくり出していくことができるのかが問われている。それは、一人ひとりの主体的な生き方や働き方を基礎に、「従属」を強いる社会や労働の有り様を「自立」へと転換していく協同の営みを各地に無数につくり出していく以外に道はないのではないか。

イギリスでは1990年代後半NHS（国民保険サービス）改革が行われた当時、ICOM（産業共同所有運動、現在コープUKに統合）が「ケアにおける共同－英国協同組合評議会のためのケア協同組合の研究－」という論文を発表した。それには「現在のコミュニティケア法（1990年制定）と実践は、全体として単に（ケアワーカーとクライエント（利用者）の）『従属』の相手を『法定セクター』から『非法定セクター』に移し替えたにすぎない。協同組合運動の使命は、ケアワーカー及びケアのニードを有する

人々を主体的に高め、自らの労働とケア、及び生活を制御できるようにすることを通じて、(人々のあり方を)『従属』から『自立』へと転換することなのである」とある。

協同組合運動の使命は、「人びとのあり方を「従属」から「自立」へと転換することである」－これは、2015年度の介護保険制度の改定や新設される子育てや生活困窮者を支援する制度の一大転換期にあって、私たち日本労協連・協同労働運動の使命ともなろう。

2013年の終わり、新年を迎えるにあたり、「労働者協同組合は、たんなる雇用や所有しているという感覚よりも、もっと深い内面的ニーズ、つまり人間性と労働とのかかわりに触れるものである」、「労働者生産協同組合は、労働者と職場の間に新しい関係を築き、もう一つの産業革命をもたらす最良の手段である」(西暦2000年における協同組合：レイドロー報告)。30年以上も前に提起された、レイドロー博士の言葉の持つ意味を「里山資本主義」との関係で、もう一度あらためて考えてみたい。